

【ポスター発表】

## 知的障害者施設における詩の朗読実践の意義に関する一考察

- 「関係性を生きる」福祉を目指して -

淑徳大学大学院 王 岩 (008180)

〔キーワード〕詩の朗読、関係性を生きる、共感する、

### 1. 研究目的

本研究は筆者の博士論文「『関係性を生きる』教育と福祉の世界 詩をめぐる実践体験を手掛かりとして」の中、知的障害者施設での実践 - 利用者との詩の朗読体験を再分析したものである。本発表では「関係性を生きる」福祉の世界の意味するところについて、筆者の実践体験に焦点を当てて論述していく。

筆者が非常勤職員の職をしている知的障害通勤施設では、利用者達は何からのかたちで仕事をしている。就労を続ける中、利用者達は気分が不安定になったり、ストレスが溜まって落ち込んでいたりする時が多い。筆者はそのような姿をみていて、社会福祉における利用者と支援者が共感的に生きることを目指す支援のあり方とは何について考えるようになった。筆者は支援者として少しでも利用者により深く関わり、その気持ちを理解し、彼等が気分を安定させて、心を休ませ癒すことができるような支援ができればと考えたのである。

そこで、筆者の小学校での詩の実践授業から得られた知見が、福祉現場でも活用できる可能性の有無について考え、利用者達と一緒に「詩の朗読」を始めたのである。この行動を通して、支援者と利用者が人間としてより深く関わり合い、「関係性を生きる」という視点から“詩の実践体験”のもつ力と可能性について、解明することを本実践の目的とした。

### 2. 研究の視点および方法

筆者は上に述べた目的について施設長と相談し、許可を得て、2010年度の8月から利用者達と隔週一回で10分程度の時間で利用者達と詩の朗読をしてきた。詩の朗読内容に関しては、利用者の興味などを考慮し、彼等読みやすい、意味の豊かな詩を朗読材料として選んでいた。代表的な詩としては、まど・みちおの『すいぞくかん』、『きりん』、黒田三郎の『紙風船』などがある。

以上により、筆者がこれまで行ってきた福祉現場での詩の朗読実践を通して、筆者と利用者との「関係性」、さらに、詩の朗読の意義と可能性について考察した。

### 3. 倫理的配慮

本研究での実践にあたり、当施設の施設長に研究目的等を説明し許可を得た。さらに、実践を行う事前に協力者（施設の利用者）に対し、書面の承諾を持ちながら、実践の目的と倫理配慮を説明し、同意書をいただいた。利用者の名前と施設名は匿名した。そして、詩を朗読した時、利用者の発話やその場で起こったことを全て真実に記録し、朗読実践研究の過程は日本社会福祉学会の研究倫理指針に基づいて、できる限り詳細に示していた。

### 4. 研究結果

詩の朗読実践という手法が、教育の世界だけでなく、福祉の臨床現場においても、支援者と利用者が共感的に生きることを目指す支援方法として活用できることを示し、利用者と支援者の間での「関係性」を見出すために必要かつ有用であることが明らかになった。

それは、知的障害者福祉施設において、支援者と利用者は同じ空間、時間に、詩の朗読を共に体験し、感じ合い、共有することによって、初めて互いに心が向き合うことになっていた。したがって、「関係性」の視点は、福祉の援助実践にとって、利用者と支援者が「生き生き」と生活するために必要な視点であることが示唆できた。そして、「関係性」の視点で、福祉における人と人の関わりを考えると、次のような変化が起こると言える。

「関係性を生きる」ことにより、利用者をより深く理解することができる。

「関係性」の視点を重視することによって福祉の質が変わる。利用者との関係が一方向ではなく、相互的な関係になることである。すなわち、支援者も利用者も共に生き生きと生活できるようになる。

福祉の利用者たちは、支援者の信頼関係を深めることができ、利用者にとって他者である支援者への理解に繋がる。これにより、利用者自身の生きている世界への見方も変化するのではなかろうかと考える。

#### 参考文献：

足立 勲(2005)『新・社会福祉言論』(株)みらい

早坂泰次郎(1994)『「関係性」の人間学 - 良心的エコイズムの心理』川島書店